

成の一因をなしているように考えられる。

(3) 高気圧の追跡

天気図分類から移動性高気圧があることが本質的特性であるので、その高気圧の性質をつかむために追跡を試みた。

(A) 極系統の高気圧がタイミール方面から真直ぐ南東進したものが最も多かった。

(B) 極方面から大西洋または北欧に南下した後東進したいわゆる北欧系統の冷たい型の高気圧が(1)について多かった。

(A)～(B)が53例のほとんどを占めているので、いちおう寒冷高気圧の存在が本質的な特性であると断定されるおそれがある。しかし例は少ないが(C)として中欧系統のわりあい暖かい高気圧として追跡される場合もあるので、この点注意を要する。

(4) 850mb 面天気図の特性

(B)で述べたように、反対海風を問題とするとおよそ1 km 以下を調べればよいことになる。しかし現業で使用している上層天気図の最低気圧面は850mb であるのでこれを使うことにした。

さて地上天気図は5つの型に分類されたが、この850mb 面天気図ではさらに簡単となり、第9図の通り日本海に高気圧がある場合と、第10図のように高気圧の中心

は黄海にあるがそれが日本海に延びている場合との2つに分類され、総ての場合に福岡での850mb 面の風向は北東であった。

次に850mb 面の等温線を見ると第11図のとおり、日本海が低温となっており、寒気を中心に沿海州にある場合(第12図)、オホーツク海にある場合(第13図)とがある。53例中上記のように日本海が低温になっている場合がほとんどであったが、第14図のように逆に日本海が温度が高くなっている場合もあった。したがって地上の高気圧の追跡の場合と同様、日本海の温度が低くなることが必要条件ではないようである。

4. 結 び

以上でわかるとおり、53例中例外なくそろっていた条件としては、日本海西部に高気圧の中心または高圧部がきて、850mb の福岡での風向が北東であることであった。したがって九州北部沿岸地方での海風は地形の影響で收れん加速されることがうなずける。この際、地上の高気圧が冷たい高気圧であり、850mb で日本海方面が低温であること、また本邦の南海上に台風または発達した低気圧がくることなどは、これを助成する条件である。

終りに当り予報課の浦川、藤および黒岩各技官の御協力に対して厚く感謝いたします。

日本気象学会昭和34年度大会および例会予定

昭和34年

- 4月 休み
- 5月 20～22日、気象庁において：総会および大会（会期中に超高層大気の特設講演）講演申込締切は3月末日の予定。
- 6月 山岳気象、乱流
- 7月 数値予報、降水機構
- 8月 気象学史と気象教育
- 9月 生気候
- 10月 気象災害、気象統計、大気汚染

- 11月 大会（会期中にレーダー気象、数値予報のシンポジウム）、風のシンポジウム（気象学会が当番）
- 12月 気象電気、IGYシンポジウム

昭和35年

- 1月 太陽活動と気象、観測と測器
- 2月 長期予報と気候
- 3月 航空気象、綜観気象